

本棚 ぶらり

『幕末まらそん侍』

土橋章宏／著
角川春樹事務所 (2015年)



◆『幕末まらそん侍』

とばしあきひろ
(土橋章宏／著 角川春樹事務所 2015年)

黒船の来航により、風雲急を告げる幕末の世。安政2年(1855年)、安中藩主・板倉勝明は、藩士たちを鍛えて異国の襲撃に備えようと、すべての家臣に「遠足」を申しつけます。それは、安中城内から碓氷峠の熊野神社までの七里余り(約30キロ)の中山道を走るものでした。

想いを寄せる姫をめぐって恋敵との対決に燃え、「どんな手を使ってでも一番になってみせる!」と息巻く、勘定方の片桐裕吾。遠足の機に乗じて脱藩し、初恋の相手と江戸へ上ろうと企てる石井政継。「藩主に乱心の気あり」と、出来心で藩を揺るがす文を江戸へ送る隠密の唐沢甚内など、家臣たちはそれぞれの事情を抱えて走ります。熊野神社の宮司も巻き込んだ幕末マラソン大会の、勝利の行方は?

日本のマラソンの始まりといわれる「安政遠足」を題材にした、軽快なスポーツ時代小説です。少しずつ繋がっていく家臣たちの物語を、ぜひ最後まで見届けてください。

◆『レンズが撮らえた幕末の日本』

いわしたてつり つかごしとしゆき
(岩下哲典・塚越俊志／著 山川出版社 2011年)

幕末の動乱期、かつてない「確かな証拠」となる貴重な記録が残されました。「写真」による記録です。カメラのレンズは、幕末という時代に生きた人々の容姿や風俗、建物、商売、あらゆるものをとらえて、写真として克明に記録しました。

国を憂い、奔走した武士たち。混乱する社会情勢の中、生命を賭けて海外へ渡航した使節団や留学生たち。本書ではその肖像を中心に、当時の空気を伝える街道や宿場町、城と城下町、船と港などの風景を記録した貴重な写真を数多く収録しています。

教科書に名の載る有名な武士たちの、気骨あふれる往時の姿はもちろん、床屋や傘張り職人の仕事風景、片肌を脱いで化粧をする女性の姿など、名もなき市井の人々の暮らしぶりも写真は伝えます。ピラミッドとスフィンクスを背景に居並ぶ侍たちをおさめた、珍しい1枚は必見です。

幕末日本の状況をビジュアルで理解し、時代の息吹を感じるのにつけての1冊です。

◆『幕末銃姫伝 京の風 会津の花』

ふじもと
(藤本ひとみ／著 中央公論新社 2010年)

「私は、どうして女に生まれてきたのでしょうか」裁縫も気働きもうまくできず、自慢できるものといえば腕力のみ。女として出来ない自分は、この先どう生きていけばよいのかと悩む12歳の八重に、兄・覚馬は「砲をやれ」と勧めます。八重は砲術を習得することに自身の新たな道を見出しました。

時は幕末、八重の住む会津の地を治める藩主・松平容保が京都守護職に任じられたのを契機に、会津藩は非情な時代の荒波の中に吞まれていきます。やがて朝敵の汚名を着せられた会津に、新政府軍の砲火が向けられた時、城と会津人としての誇りを守るために、八重は銃を手に取り、立ち上がるのでした。

2013年大河ドラマの主役ともなった銃姫・山本八重の、会津開城に至るまでの前半生を描いた作品です。女性が思うように生きられない時代にあって、自分の信じる道を貫き、果敢に前を向いて生き抜こうとする八重の、凛々しい生きざまが胸に迫ります。

明治以降の八重の姿を描く『維新銃姫伝 会津の桜 京都の紅葉』もあわせてどうぞ。

◆『知識ゼロからの幕末維新入門』

きむらさちひ こ
(木村幸比古／監修 幻冬舎 2008年)

「日本を今一度、せんたく致し申し候」薩長同盟を成立させた立役者・坂本龍馬、薩摩藩の名家老・小松常刀、江戸城無血開城に尽力した勝海舟など、幕末・維新の時代には多くの志高く、有能な人材が活躍しました。その中から主な人物47人を取り上げ、略歴や功績、人間関係、名言や後世に伝わるエピソードを交えて紹介します。

長州藩出身で討幕派の高杉晋作は、面長の顔立ちで、「乗った人より馬が丸顔」という歌が作られたこともあったそうです。また、大村益次郎は大の豆腐好きで、食事や酒の肴にも豆腐を欠かさず食べ、客人にも豆腐ばかりを出したと伝わっています。幕末・維新の大人物たちが身近に感じられるエピソードのほか、時代背景や各藩の動き、「公武合体」「尊王攘夷」などの主義思想についても、豊富なイラストや図を用いて、分かりやすく解説します。

幕末から明治維新にかけての激動の時代を理解し、読み解くための入門書です。「文章ばかりの本は苦手」「歴史の本は難しそう」という方も気軽に読める1冊です。

